四国大学紀要，(A) 40：13－19，2013
Bull. Shikoku Univ. (A) 40：13－19，2013

A 県における子育て支援ニーズに関する調査研究（その２）
―― 育児ストレッサーの因子構造 ――

小川佳代・中岡泰子・富田喜代子・前田宏治・加藤孝士・
高橋順子・石原留美・尾崎八代・中澤京子・三木章代・
吉村尚美・江口実希

A Study on the Needs for Supporting Child Rearing in A Prefecture（Part 2）
― Factor Analysis of Child–Rearing Stresses ―

Kayo Ogawa, Yasuko Nakaoka, Kiyoko Tomida, Koji Maeda, Takashi Kato,
Junko Takahashi, Rumi Ishihara, Yayo Ozaki, Kyoko Nakazawa, Fumiyo Miki,
Naomi Yoshimura and Miki Eguchi

ABSTRACT

The purpose of this study was to investigate the child–rearing stresses of parents and families of infants by using the Maternal Parenting Stressor Scale.

Subjects included 477 parents and family rearing infants.

Factor analysis showed the following stressors：（Ⅰ）hardships in dealing with children and discipline（Ⅱ）parents having no time for themselves（Ⅲ）being engaged in rearing children alone（Ⅳ）problems in eating patterns of children（Ⅴ）a lack of understanding and uncooperative attitudes of husbands（Ⅵ）being constantly followed by children.

Thus, it might be suggested that it is necessary that nurses provide more support for parents.

Keywords : Childcare support, child–rearing stress, stressor in child care, factor structure

緒　言

近年，育児不安を持つ母親が増えていることや乳幼児虐待が社会問題となっており，子育て中の母親のストレス状況の把握やその支援方法についての検討が進められている。そのなかで，少子化にともない親になるまで子どもの世話をしたことがないという母親が増えつつあることも指摘されている。核家族化が進むことで祖父母からの経験的な育児方法の伝達の機会も減少し，家族における育児機能の低下を招いているといえる。家族の機能が十分に得られない場合は，外部のサポートが必要となるが，地域のつながりが希薄化している状況では，育児サポートの機能も期待できない。その中で，子どもにどう接していいのかわからないなどの悩みや不安を抱えている母親は，相談する相手も乏しく，育児の孤立化が起こっている。

これまでに乳幼児を育てている母親を対象として，育児ストレッサー尺度を用いた調査研究を行ってきた[1－9]。その結果，育児ストレスは母親にとってマイナスばかりでなく，ストレスへの対処能力を強め，その対処過程の中で感じたことや考え方が母親自身の自己肯定感を高め，成長や喜びにもつながっていることが分かった。また，子育て中の母親を対象として離乳期の心配についても調査分析を行った。その結果，離乳方法によっては育児不安を増加させてしまう場合もあることが分かった[10]。初めて子育てを経験する母親や，離乳の時期が１歳半以降になった母親も，不安が強い傾向がみられた。そして，家族（特に夫と実母）や友人，先輩ママなどの相談相手や，側にいて支えてくれる人を求めていることが分かった[11]。

そこで，今後は，母親を取り巻く家族や地域の人々と，サポートのためのサービスや施設などの環境と

の関連を，女性のライフサイクルの中で，視野を拡大して検討する必要があると考えた[12,13]。これらの実践は，保育所や地域の子育て支援センターを拠点とすることで，幼稚園・保育所で勤務する専門職者との連携による実践活動を行うことが可能である。

今回は，大学の位置する地域における子育て環境を把握し，大学教員としてより具体的な子育て支援システムを構築するために，育児ストレス構造の地域の特性を明らかにすることを目的とした。

概念枠組み

本研究では，図１に示したように，大学が企画する子育て支援システムとしてSNS（Social Networking Service）を活用した支援活動モデルを考えた。SNSとは，人と人とのつながりを促進・サポートするコミュニティ型のWebサイトのことである。SNSを利用することによって県内のどこからでも参加でき，専門家からの子育て情報の収集や，会員相互が情報を発信し共有することを支援するシステムである。

このモデルにおける子育てニーズに焦点を当てて，今回は，子育て中の親や家族の育児ストレス状況の地域の特性について分析した。

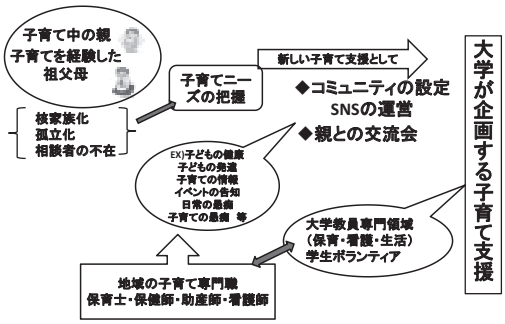

図１）子育て支援システムの構成図

研究方法

１．期間

平成24年11月から平成25年３月とした。

２．対象者

A県内子育て支援センターに通っている子どもの親及び家族630名を調査対象とした。

３．測定用具

本研究では，子どもを育てている親や家族の育児ストレスの背景には，「子どもの背景」「母親自身の問題」「母親と子どもあるいは夫との関係」などの要因が関係していると考え，日下部らの育児ストレッサー尺度を用いた。妥当性と信頼性が確認できていること。育児に関わる親のストレスを測定できることから，この測定用具を採用した。

４．データ収集方法

調査の手続きに関する内容は「徳島県における子育て支援ニーズに関する調査研究　その１」で報告している。

育児ストレッサー尺度は31項目からなり，評定段階は。「いつも感じる」４点，「ときどき感じる」３点，「まれに感じる」２点，「全く感じない」１点のリッカート法による質問紙調査法である。

５．分析方法

本研究で用いた測定用具は，すでに信頼性と妥当性が確認されているが，調査時期や地域など対象者の特性が影響すると考え，A県内の状況を明らかにするために，統計解析PASW　Statistics　17.0を用いた記述統計と因子分析（主成分分析，プロマックス回転），信頼性分析（内的整合性）の確認を行った。

倫理的配慮

本研究に当たり，四国大学倫理審査委員会の承認を得た。調査については，該当施設の施設長に研究目的と方法を説明し承諾を得た後，施設に持参して対象者に配付した。調査用紙には，研究目的と調査への参加は自由意思であること，また無記名で結果は統計的に処理されるので個人が特定されることはないこと，調査への協力の有無で今後のサービスへの影響はないことを明記した。記入後の回収は，留め置き法により，各施設に設置した回収箱への投函とした。測定用具の使用については事前に書面で作成者の了承を得た。

結　果

徳島県内17か所の子育て支援センターを利用している630名の親及び家族を対象として調査した結果，477名の協力が得られた（有効回答率75.7%）。

1．対象者の属性（詳細は「徳島県における子育て支援ニーズに関する調査研究　その１」参照）

対象者のうち，女性が464名（98.1%）であった。年齢は33.4±5.71歳であった。子どもの数は，１人が231名（48.4%），２人が（37.7%），３人が53名

表１　徳島県内全データの育児ストレッサーの因子構造（n=477）

項　目	因子構造 I	II	III	IV	V	VI	共通性	平均値	標準偏差
≪子どものしつけや対応への困難≫　Cronbachのα係数=0.867									
３．聞き分けがない	**.816**	.084	-.073	-.174	.027	.002	0.595	2.27	0.822
６．癇癪（かんしゃく）をおこす	**.792**	-.058	-.195	.047	-.011	.054	0.524	1.96	0.885
５．ぐずるとなだめにくい	**.790**	-.046	.045	-.060	-.032	.221	0.664	2.04	0.827
２．大人の理屈が通らない	**.737**	.117	.022	-.167	-.034	.063	0.569	2.43	0.902
７．言うことを聞かない	**.721**	.197	-.130	.058	-.018	-.131	0.626	2.39	0.811
４．子どもの泣いている理由がわからない	**.690**	-.172	.108	-.071	.020	.317	0.556	1.85	0.779
24．よく泣く	**.613**	-.086	.084	.047	.000	.358	0.578	1.884	0.886
23．どうしつけたらよいかわからなくなる	**.518**	.020	.200	.098	.079	-.074	0.530	1.996	0.865
26．よその子どもとの間に問題を起こした時の対処の仕方がわからない	**.471**	-.063	.288	.209	-.024	-.347	0.630	1.99	0.835
≪自分の時間がない≫　Cronbachのα係数=0.872									
18．自分の時間がない	-.040	**.920**	-.006	-.051	-.013	-.025	0.757	2.66	0.960
８．一人になれる時間がない	.040	**.776**	-.014	-.192	.058	.139	0.621	2.67	1.005
９．子どもを育てるために我慢をしていることがある	.092	**.734**	.037	-.126	-.003	.014	0.577	2.56	0.893
17．家事をすべてする時間がないこと	.025	**.727**	-.219	.158	.037	.090	0.571	2.36	0.987
10．子どものために仕事や趣味を制約される	-.107	**.703**	.310	-.066	-.083	-.078	0.621	2.55	0.879
19．自分のペースが乱される	.084	**.670**	-.035	.191	-.038	-.001	0.619	2.45	0.903
≪一人きりの子育て≫　Cronbachのα係数=0.777									
11．子どもと二人だけで家にいる	-.084	-.030	**.845**	.098	-.203	.076	0.618	2.36	1.086
12．自分と子どもだけの世界で，社会との接点がない	.066	-.025	**.825**	-.138	-.128	.026	0.592	1.83	0.906
28．仕事を辞め，会社とのつながりがきれた	-.002	-.090	**.721**	.042	.091	-.154	0.560	2.08	1.085
22．短時間子どもを預けられる人がいない	-.091	.087	**.630**	-.104	.221	.109	0.525	1.85	1.064
21．一人きりで育児をしている	-.106	.120	**.616**	.001	.262	.080	0.608	1.87	0.968
≪子どもの食行動の問題≫　Cronbachのα係数=0.722									
15．子どもが小食である	-.120	-.097	-.113	**.845**	.100	.031	0.583	1.83	0.997
14．自分で食べたがらない	-.148	-.131	.076	**.839**	-.045	.255	0.620	1.86	0.940
27．思うような食べ方をしてくれない	.104	.022	-.002	**.689**	.041	.068	0.586	2.29	0.959
20．子どもに食べさせなくてはならない	-.174	.361	.022	**.572**	-.087	.150	0.525	2.35	1.065
16．他の親としつけ方が違う	.309	-.003	-.022	**.441**	-.007	-.250	0.441	1.75	0.753
≪夫の無理解・非協力的態度≫　Cronbachのα係数=0.890									
30．夫が育児に非協力的である	-.006	.014	-.039	.000	**.928**	.015	0.843	1.75	0.931
31．夫が家事に非協力的である	.038	-.062	-.004	-.004	**.901**	-.015	0.790	1.99	1.060
29．「育児は，母親の仕事だ」と夫は思っている	-.036	.031	-.008	.077	**.853**	-.028	0.762	1.93	1.014
≪子どもにまとわりつかれる≫　Cronbachのα係数=0.612									
13．一人にすると泣く	.110	.049	.125	.180	-.070	**.681**	0.612	2.19	0.998
１．まとわりついて離れない	.260	.107	-.113	.108	.059	**.668**	0.641	2.37	0.945
固有値	9.56	2.71	1.89	1.84	1.68	1.17			
寄与率	30.82	8.75	6.09	5.94	5.42	3.78			
累積寄与率	30.82	39.58	45.67	51.6	57.03	60.81			

（11.1%），4人が8名(1.7%)，5人が1名(0.2%)であった。職業は，無職が270名（56.7%），育児休業中71名(14.9%)，フルタイム63名(13.2%)，パートタイム42名（8.8%）の順であった。

2．主要変数の記述統計

育児ストレッサー31項目の単純集計の結果，高い値を示したのは「8.一人になれる時間がない」(2.67±1.009)，「18.自分の時間がない」(2.65±0.958)，「9.子どもを育てるために我慢していることがある」(2.56±0.891）などであり，低い値を示したのは「12.自分と子どもだけの世界で，社会との接点がない」(1.68±0.885)，「16.他の親としつけ方が違う」(1.74±0.752)，「21.一人きりで育児をしている」(1.75±0.908）などであった。(数値は平均値±標準偏差を示す)

3．育児ストレッサーの因子構造　以下，≪　≫は因子名，「　」は項目を示す。

育児ストレッサー31項目を変数とした因子分析と信頼性分析の結果，1項目は因子負荷量0.4以下となり削除し，固有値1.00以上，累積寄与率60.81，因子負荷量0.441以上を解釈し，6因子を抽出した（表1）。また，先行研究を外的基準と設定した妥当性は確認できた。

因子Ⅰは，「3.聞き分けがない」「6.癇癪をおこす」など9項目で構成され，≪子どものしつけや対応への困難≫と命名した。α係数は0.867であった。因子Ⅱは，「18.自分の時間がない」「一人になれる時間がない」など6項目で構成され，≪自分の時間がない≫と命名した。α係数は0.872であった。因子Ⅲは，「11.子どもと二人だけで家にいる」「12.自分と子どもだけの世界で，社会との接点がない」など5項目で構成され，≪一人きりの子育て≫と命名した。α係数は0.777であった。因子Ⅳは，「15.子どもが小食である」「14.自分で食べたがらない」など5項目で構成され，≪子どもの食行動の問題≫と命名した。α係数は0.722であった。因子Ⅴは，「30.夫が育児に非協力的である」「31.夫が家事に非協力的である」など3項目で構成され，≪夫の無理解・非協力的態度≫と命名した。α係数は0.890であった。因子Ⅵは，「13.一人にすると泣く」「1.まとわりついて離れない」の2項目で構成され，≪子どもにまとわりつかれる≫と命名した。α係数は0.612であった。

4．因子成分の相関

因子Ⅱ≪自分の時間がない≫が，因子Ⅰ≪子どものしつけや対応への困難≫，因子Ⅲ≪一人きりの子育て≫，因子Ⅳ≪子どもの食行動の問題≫。因子Ⅴ≪夫の無理解・非協力的態度≫の4つの因子と有意な成分相関を示した。また，因子Ⅲも同様に因子Ⅰ，因子Ⅱ，因子Ⅳ，因子Ⅴと有意な成分相関を示した。因子Ⅵ≪子どもにまとわりつかれる≫は他の因子との相関は見られなかった（図2）。

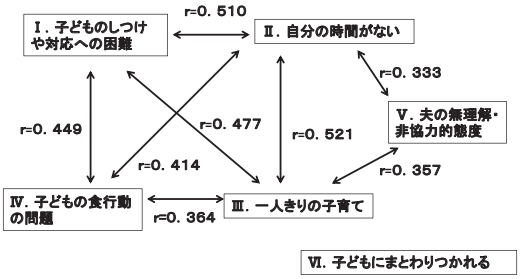

図2）子育て支援センターに通う子どもの親の因子成分相関

考　察

育児ストレッサー尺度を用いて，A県の子育て支援センターに子どもを参加させている親と家族を対象として育児ストレス状況を調査し，因子構造を明らかにした。そこで，今後の子育て支援方法を検討するために，今回の研究で明らかになった育児ストレスの実態から考えられることを述べる。

因子構造のうち1番目の因子として抽出されたのは≪子どものしつけや対応への困難≫であった。このことから，育児に関わっている親や家族にとって最もストレスフルなことは子どものしつけや対応だと捉えていることが推測される。子育ては，本来，子育てする側である大人の成長の機会でもあり，子どもとの交流を通して学ぶ場でもある。しかし，子育てを「しつけ」や「きちんと育てなければならない」という捉え方が強いと，子育ての体験がストレ

スの高いものになってしまう。核家族化が進み，子育てのコツや工夫について，親や地域の人々から伝承される機会もほとんどなくなっているので，お互いに情報交換したり学びあったりする場が必要ではないかと思われる[14]。

次に抽出された因子は，≪自分の時間がない≫であった。本来子育ては，子どもが相手の立場で物事を考えられるようになるまでは，育てる側が子どものペースを尊重しながら関わることが必要である。しかし，それは子育てを中心的に行っている者のみに強制するものではなく，家庭の中で，そして地域全体でそれを支える仕組みが必要である。３番目に抽出された≪一人きりの子育て≫とも関連して，子育てを母親だけに任せてしまっている状況が推察できる。この状況は因子成分相関にも表れている。≪自分の時間がない≫ことと≪一人きりの子育て≫と捉えていることが育児ストレスの中心的な因子となって，それらが≪子どものしつけや対応への困難≫や≪子どもの食行動の問題≫のストレスとの関連を強めていると思われる。その要因として，弱いながらも≪夫の無理解・非協力的態度≫が影響していると考えられる[15]。

これらのことから，子育て中の親や家族は，自分の時間が持てるための子育ての協力者や社会とのつながりを感じられるようなサークル仲間や友人との交流などを求めているといえる。

また，他のストレス因子とは相関が見られなかったが，子ども本来の特徴である「一人にすると泣く」ことや「まとわりついて離れない」ことをストレッサーとして捉えていることが分かった。それまでの生活体験の中で，子どもと関わることが少なかった親にとれば，このような子どもの特徴もストレスになるといえる。自分の感じている子ども観が肯定的なものから否定的なものへ転換されると虐待へと発展してしまう恐れもある。親のもつ子ども観をより肯定的なものにするためにもお互いにストレスと感じていることや困っていることを自由に表現する場も必要であると考えられた。

結　論

１．子育てをすることによって，自分の時間が持てず，子育てを一人きりでしていると捉える事がストレッサーとして強く影響している。
２．子育てをすること自体のストレスと，子どもにしつけをしなければいけない，食事を食べさせなくてはならないといった子どもの世話に対するストレスは関連している。
３．子育て者が感じているストレスに，夫の無理解や非協力的態度が影響を及ぼしている。

今後の課題

今回は全体的な育児ストレス構造を明らかにしたので，今後，地域ごとの育児ストレス構造の特性を見出し，より具体的な支援方法につなげる必要がある。

また，今回の対象者は，子育て支援センターの活動に参加した無職あるいは育児休業中の親や家族が多かった。今後は，職業のある親の育児ストレス状況や病気や障害のある子どもの育児を行っている親を対象とした調査も必要である。

謝　辞

本調査にご協力いただきました多くの皆様に深く感謝申し上げます。

文　献

１）三浦浩美，植村裕子，野口純子，小川佳代，舟越和代ほか（2002）３歳児を持つ母親の育児ストレスにおける対処行動，第33回に本看護学会論文集－母性看護－，37－39.
２）小川佳代，舟越和代，榮玲子，三浦浩美，植村裕子ほか（2002）３歳児をもつ母親の育児ストレス－夫のサポート要因からの分析―，第33回日本看護学会論文集―小児看護－，82－84.
３）植村裕子，三浦浩美，野口純子，舟越和代，小川佳代ほか（2002）香川県における３歳児を持つ母親の育児ストレス構造－育児ストレッサー尺度を用いて－，香川母性衛生学会誌２（１），62－68.

4）榮玲子，舟越和代，小川佳代，野口純子，三浦浩美ほか（2003）乳幼児期の子どもを持つ母親の育児ストレス（第１報）－育児ストレッサー因子の解析－，香川県立医療短期大学紀要，第５巻，11－16.
5）舟越和代，榮玲子，小川佳代，野口純子，三浦浩美ほか（2003）乳幼児期の子どもを持つ母親の育児ストレス（第２報）－対象特性からみた育児ストレッサー―，香川県立医療短期大学紀要，第５巻，17－23.
6）松村惠子，植村裕子，三浦浩美，野口純子，小川佳代ほか（2006）母親の育児ストレスに関する研究，香川県立保健医療大学紀要，第２巻，19－28.
7）野口純子，小川佳代，松村惠子（2006）乳幼児を育てている母親の悩みと育児ストレス－保育所児と幼稚園児の比較－，香川県立保健医療大学紀要，第２巻，79－86.
8）小川佳代，舟越和代，三浦浩美（2009）保育園児の母親のわが子に抱く感情と養育行動との関連，チャイルドヘルス，12（２），46－49.
9）舟越和代，大池明枝，三浦浩美，野口純子，小川佳代ほか（2007）地域の子育て支援活動における看護系大学教員の役割－子育て支援センターを利用している乳幼児の母親対象の調査から－，地域環境保健福祉研究，10（１），48－52.
10）中澤京子，齋藤啓子，三木章代，小川佳代，寺尾紀子（2010）離乳期の子どもの母親の乳離れに関する不安と関連要因，第41回日本看護学会（小児看護），112－114.
11）齋藤啓子，三木章代，中澤京子，小川佳代，寺尾紀子（2010）乳幼児の離乳に影響をおよぼす要因の検討，四国大学紀要（31），35－40.
12）加藤孝仕（2012）母親の主観的幸福感とソーシャル・サポートの関係，小児保健研究71（３），450－454.
13）小川佳代，榮玲子，野口純子，三浦浩美，竹内美由紀ほか（2010），地域子育て支援事業の効果に関する研究.
14）北野幸子・立石宏昭（2006）子育て支援のすすめ，ミネルヴァ書房.
15）大日向雅美（2000）母性愛神話の罠，日本評論社.

抄　　録

本研究の目的は，育児ストレッサー尺度を用いて，乳幼児を育てている親と家族の育児ストレスを測定し，因子構造を明らかにすることである。

対象者は477名の乳幼児を育てている親と家族であった。

因子分析の結果，以下の６つの因子が抽出できた。（Ⅰ）子どものしつけや対応への困難，（Ⅱ）自分の時間がない，（Ⅲ）一人きりの子育て，（Ⅳ）子どもの食行動の問題，（Ⅴ）夫の無理解・非協力的態度，（Ⅵ）子どもにまとわりつかれる。

その結果，子育て支援者は乳幼児を育てている親と家族への支援をより多く提供する必要性があることが示唆された。

キーワード：育児支援，育児ストレス，育児ストレッサー，因子分析